



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	空所はどこにあるのか？
Author(s)	小川, 了; OGAWA, Ryo
Citation	独語独文学科研究年報, 24, 26-38
Issue Date	1998-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26070
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_P26-38.pdf



空所はどこにあるのか？

小川 了

1. 言語の発見

乳児にとっては、いわゆる「初語の発現」に至るまでの十数ヵ月が、言語の獲得に必要な準備期間に当たるとする報告がある¹⁾。それによると、授乳場面で見られる新生児の乳首を吸っては休み吸っては休むという（ヒト以外の哺乳動物の赤ん坊には見られない）行動パターンと、吸うのを休んでいる時に母親が意識せずに行う赤ん坊の体を揺する行為との間には相関関係があり、生後6～8週齢では授乳時に適切なタイミングで体を揺すってくれない母親に対してクーイング（げっぷやしゃっくり、泣き声などとは区別できる発声）によって働きかけ母親の反応を引き出そうとする、そして4ヵ月齢になると音声の模倣行為が見られ（「母親語²⁾」のメロディータイプに対して顕著な傾向を示し、この時の模倣の成功率と初語発現の早さとは相関関係にある）、これと前後して（呼吸と栄養摂取の両立という段階を終え）言語音の発声を物理的に保証してくれる喉の形態的变化による最初の声変わりが起こる、それから特定の事物や欲求に対応する喃語³⁾の時期を経て「初語の発現」に至るというのである。

「今まで大多数の言語学者や心理学者は、この初語発現を子どもの発達上の出産以降はじめての大イベントであるにとらえ、言語発達の出発点とみなしてきた。けれども本当は、初語は子どもの歴史のなかで突如姿を現わすのではなくて、そこにいたるまでには長きにわたってたえず準備を整える必要があることが分かってきたのだ⁴⁾」

ここでは、初語の発現以前に見せる乳児の（恣意的で受動的な印象を与える）行動が、自分を取り巻く環境との、理由のある積極的な交渉とみなされ、その際見られる唇の動きやクーイング、「母親語」の模倣音声は、乳児の（養育者に対して）感じている情動的な要因と常に結びついていると考えられている。

この考え方に立てば、いわゆる言語と呼べるものではないにせよ、初語発現以前の乳児も唇やクーイングや模倣音声、喃語を媒体として、自分の中にある何かを周囲の人間に伝えようとしているのであり、その限りでは、大人が言語を使って行なっていることと変わらないと言えよう。確かに、大人の言語運用と比べると、乳児のクーイングや喃語によるふるまいはまるで別物に見える。しかし、両者の目標がともに何かを伝達することにあるのなら、両者を区別しているのは、何を使ってそれを行なっているのかという点にあると考えられる。乳児は初語の発現という事態において、言語を獲得する、というよりは、諸々の伝達の試みの中から、クーイングや喃語とは別の道具として言語を発見するのだと言えないだろうか。もっともそれはその便利さ故に周囲の大人たちがそうなるように仕向けた結果としての発見である。いわゆる一語文に始まる言語の断片の発見の連続とともに、あるいは、それによって、それまではもっぱら情動的な動機で一方向的に環境へ働きかけて周囲の大人たちに分かってもらっていただければよかった子どもも、そういう働きかけをするのに必要な言語という道具の使い

方を覚えていかななくてはならなくなる。自分にあてがわれた言語に、あるいは、その規則に、経験的に慣らされていくのである。

初語発現以降の幼児の言語の経験は、もっぱら語彙の集積という形をとり、最初のうちはその中の大半は身近な人や事物の名前で占められるだろう。つまり具体的に指し示せる対象の名前だ。例えば、＜クルマ＞という音の連なりを、大人は車の絵や写真、ガレージの自動車を指さしながら子どもに教えるだろう。一組の音の連鎖とひとつの対象の対応が約束として教え込まれる。いったんその対応関係を覚えたら、＜クルマ＞という音連鎖は自動車以外の対象に使ってはならないし、自分がそれを耳にした場合には正しい対応物を思い浮かべなくてはならない。当然のことながら、このことは、子どもの成長に応じて、物の名前以外の表現（「食べる」「痛い」「バカ」「うれしい」「はやく」等々）にも拡大適用される。子どもは、様々な場面で話し手がその都度見せる表情や語調、仕草や行為、あるいはその時その時の自分の感覚や感情、欲求、ふるまい、さらには相手とのかかわり、その場の雰囲気などといった実生活上での具体的な経験とともに、これらの諸表現に出会う。こうした物理的な指示対象を持たない音連鎖も、特定の場面で特定の事態と対応させられ、それが反復されることによって、特定の印象やイメージなどを呼び起こすようになるだろう。つまり、言語の使用者は大人も子どもも、言語を使って伝達したり理解したりするためには、ある音連鎖と、それに対応する同じ（指示対象、概念、印象、イメージの）表象とのつながりを共有していなくてはならないということだ。この点では、子どもは常に従属的な立場にいて、大人の示す音連鎖と表象とのつながりを一方的に受け入れて、それを踏襲しなくてはならない。子どもは、まず伝達と理解の両方の行為を保証してくれる言語という大人と共通の基盤の上に立つのであり、それによって（クーイングや喃語に比べると）能率的に自分の言葉を相手に理解させることができる便利さと同時に、（クーイングや喃語の時期にはなかった）相手の発する言葉を理解するという負担を背負い込むことになる。

2. 伝達と理解

伝達と理解の二種類の行為が言語によって可能なのは、その都度の言語表現が、話し手と聞き手の間で共有されている同一の表象を担っているからだ、というのが日常生活での前提だ⁵⁾。この表象は通常は「意味」と呼ばれ、特定の言語の使用者全体の共有財産として（言語に転換されて）辞書の中に保存されている。しかし、辞書とは常に事後報告にすぎない⁶⁾。初語の発現以降、人間が言語という道具の使用方法を会得していく経験において、辞書が決定的な役割を果たすことはない。人間が経験的に覚えていくのは、ひとつは表現と表現の組み合わせ（ここではもちろん統語論的な文法規則のことを言っているのではない）、さらに表現（及び表現相互の組み合わせ）とそれが使用される（話し手の表情、仕草、指示物、場面、人間関係等々をひっくるめての）状況との組み合わせだ。辞書中の概念としての「車」の意味を知る前に、子どもは（音連鎖としての）＜クルマ＞という表現を様々な他の表現とともに合わせて経験する（＜クルマ＞としか発声しない親はいないだろうから）。この時、例えば、カーマニアの親と、車を持たない主義の親とでは、＜クルマ＞という表現が使われる頻度やそれと組み合わせられる他の表現の種類に自ずと差があるだろうし、どんな状況下でそれが口

にされるかも知なかったものになるだろう。双方のそれぞれの傾向性もたらす影響そのものを云々したいのではない。問題は、ある表現の表象の形成がそれ自体として行われるのではなく、その表現を取り巻く他の諸表現や諸状況との反復的なかわり合いの中で試行的に行われるということと、またそれ故に表象が完全には固定されることなく常に流動的な性質を残すものだということである。人間は日常生活での様々な経験を通して表現に対応する表象を形づくってゆくが、それは常に暫定的なものでしかない。とりあえずの輪郭を有しながらも、それはいつも不安定で揺らいでいる。しかし、まさにこのことが、表現と表現との結びつきを可能にしているとも言える。こうした表象のルーズな性質がなければ、人間は「机の脚」という表現の組み合わせすら作り出せなかっただろう。表象の性質に対して言語表現は固定的で安定した性質を持ち、前者と相補的な関係にある。表象が、不安定で流動的なものでありながらも輪郭を保つことができるのは、まさにそれが特定の表現に対応しているからだ。大人たちが慣習的に用いている表現相互の（あるいは状況との）組み合わせのパターンを子どもたちは踏襲してゆくのであり、そのことによって、子どもの頭の中に蓄えられた表象群にも徐々に表象の連鎖のパターンが作られてゆくのだ。子どもが覚えていくのは、（事前に決定済みの）言葉の「意味」ではなく、その都度その子がかみとった諸表現の組み合わせの可能性だ。「意味」と呼べるものがあるとすれば、それは表現の知覚によって活性化される、人間の頭の中にある各表象の（他の表象との）連結可能性のことである。表現は、表現相互で連結することによって、表象群の中から選択的に特定の表象相互の連結を活性化する。一語文のような場合には、その表現（つまり一個の単語）は、状況とのつながりによって、同様に表象の活性化を促す。したがって、辞書で調べるという行為は、経験的に集積された表現と表象との対応のストックがあって初めて可能になる。それは、意味を発見する作業ではなく、自分のその表現に関する経験を確認することである。つまり、見出し語の表現に対する表象と、その語の定義・説明に使われている表現に対して抱く表象とが、辞書を引いている者にとって自然な整合性をもつ時、彼はその見出し語の意味を確認したことになる。

本論に出てくる「表現」という言葉が指示しているのは、実際に話されたり書かれたりした、単語やその連なり、文や文の連なりのことである。文の連なりを念頭においている場合は「表現の連鎖」という言い方もしている。ここでこうした言い方を選んでいるのは、語にしろ文にしろ、それは発信者（話す人と書く人）の内的な表象が外に表されたものだと考えているからであり、また、語と語、あるいは文と文とを「意味」が結び付けているとする結束性という考え方を排除したかったからだ。結束性は、話されたこと、書かれたものに付随する特性ではないし、また、それが発信者の意図の中には「あった」かもしれないと推測はできるものの、決して検証はできない。作り上げられた表現の連鎖は、それを前にした受信者の表象への転換のプロセスにおいて、発信者の意図とは無関係に、受信者の頭の中で一度解体された後に再編成されるのである。

それでは「コミュニケーション」と呼ばれている事態においては何が伝達されているというのか？ 伝達されているのは、表現（の連鎖）だけである。発信者は自分の中にある特定の表象にふさわしい表現を選んで発信し、受信者はその音声や文字による表現を聞いたり読んだりして自分にとって自然な表象を活性化する。この時、発信者の側の「表象と表現」の対応あるいは受信者の側の「表現と表

象」の対応が、適切なものかどうかということは、表象それ自体が取り出せないのだから、本人以外の人間には判断できない。また（初語発現以降の人間の）表象の形成が個々人で異なる状況下で行われるので、発信者と受信者の双方が同一の表現に対して「同一の表象」を共有しているという大前提は極めて心細いものだし、そもそも検証不可能なことである。子どもが<クルマ>という表現を指示対象とともに記憶する場面を想定した場合でさえ、その時点でもうすでに、その表現を教える大人の（過去における全く異なる状況下で形成された）表象と、今まさに形成されようとしている子どもの表象は同じはずがないし、将来的に同じになる可能性もない。それはひとえに経験の多寡にもとづく差である。したがって、コミュニケーションにおいて、表現とともに、言葉の意味とか発信者の意図というものが伝達される可能性はない。コミュニケーションは常に試行的で、常に未完結に終わる、つまり受信者の理解を確認することは最終的には不可能である。受信者にとって表現は常に解釈の材料でしかない。これが言語を使用する時の伝達と理解の実情ではないだろうか⁷⁾。

実生活のコミュニケーションの場面で、あたかも意味や意図が共有されているように見えるのは、それで問題が生じない範囲内に限られる。「理解行為の障害、相違、困難が生じたとき初めて、その克服の試みと同時に、解釈学的な省察も始まる⁸⁾」というわけだ。しかし、それは意識されるかされないかという違いにすぎない。人間は、誰もが生まれ落ちてから——言語に関する経験も含めて——無数の経験を経て現在に至っている。そして経験を通して蓄積された無数の表象群を持っている。この表象の量に比べると、人間の道具である言語の語彙数は、はるかに下回るだろう。さらに「使用語彙 aktiver Wortschatz」と「理解語彙 passiver Wortschatz」のちがい⁹⁾を考えると、個人で使用可能な語彙数は非常に限られていることが分かる。したがって、人間は、言葉にならないもの、あるいは、できないものについては、言語による伝達という形にすら持っていけない。また、表象の言語化が（その当事者にとって）必ずしも過不足のないものだとは限らない。言語によるコミュニケーションにおいて人間は最初から、言いたいことを「すべて」表現することも、表現から「すべて」を理解することも諦めるしかないのだ。「誰かが言ったり書いたりしたことを理解するとは、言葉をやりとりすることで、話し手が意図していたらしいことと両立可能だとみなされる概念構造を、その時々脈絡において築くということに他ならない。この両立可能性は、しかしながら、直接比較して調べることは決してできない。それがはっきりするのは、聞き手が自らの解釈から引き出していた予想に反することを、話し手がその後で、言ったりしたりしない、という場合だけである。／こういう見方をすると、あらゆる言語コミュニケーションには、本来備わっている避けがたい不確定性があるということになる。¹⁰⁾」言語表現は、言ってみれば、店屋物の出前持ちではなく、食材の宅配便だ。このちがいは、受け取る側がそのあと何をするようになるか、という点によく表れる。表現の受信者は、その貧弱な言語という材料を自分の手で加工する。受信者は表現それ自体はもちろん、発信者や話の前後関係、彼らのいる状況に関することも考慮して、発信者の「意図」なり表現の「意味」なりを自分の表象の形で再構成しようとするだろう。発信者には言語化しきれないものが残り、受信者の中では表現そのものに対する表象以上のものが活性化する。伝達の行為に比べると、理解の行為の作業量はずっと多いと言えるだろう。これは、通常は発信者に直接問いかけることが（でき）ない、読

書という形の理解作業の場合には、さらに顕著になるだろう。

3. 読者論①

文学作品に備わっている文学的な特性を確信している人たちにとっては、文学／非文学のちがいは問題にならない。それは一目瞭然なのだ。とするなら、彼らが、die literarische Kommunikation, die literarische Sondersprache, der literarische Charakter¹¹⁾ という言い方する時、それは、「文学に特殊な」コミュニケーションとか言語とか特性を表しているのだろうか。そういった、文学に特殊な何かは本当にあるのだろうか。彼らが「読者」と言う時も、それは「文学を読むためにいる読者」を意図しているという印象を受ける。でも、そんな読者はいるのだろうか。それは文学作品の構造を一般的な形で記述するために必要なだけの構成概念にすぎないのではないか。あまりに難解な作品を読んで、その「文学性」を理解できず、これは文学なんかじゃないと言う読者がいたら、彼らはこの人に何と説明してやれるのだろうか。その読者がもっと分かりやすい作品を指して、これが文学だ、と言ったらどうだろう。文学と名のつくものにはどれにも彼らの言う文学性が備わっているのだろうか。それとも彼らは文学／非文学という区別の他にも、例えば「高尚文学／通俗文学」¹²⁾ というような区別も設けているのだろうか。いずれにしても、前提として「文学」の定義があれば問題はないのだ。文学とは文学性を備えた作品のことで、文学性とは文学作品に固有の特性だ、という説明をするのでなければ問題はない。

ヴァインリヒはかつて「コミュニケーション論的文学研究」と題して 20 のテーゼを立て、作者、テキスト、読者という三者のコミュニケーション過程を調べる文学研究の方法を提案していた。それによると、作者と読者には共通のコードがあって、「そのコードは、特殊なものとしての文学テキストに対して、比較的一般的なものである・・・(S.9 These VIII)」。そして「個々の読者（そして社会的な各々の読者グループ）は皆、ひとつの文学作品を、他のどの読者とも、また、作品の最初の読者と考えられる作者とも異なる理解をする(S.9 These X)」と言うのだが、その理由は、「文学コミュニケーションが（作者や彼の作品の意図という）特殊なものを、（拘束力のある言語あるいは文学特有言語のコードという）一般的なものと結びつけていて、その結果、言語的な形に固定された不変の作品は、様々な読みの予期を持った様々な読者に対して様々な意味を引き受けることになる(S.9 These IX)」というところにあるようだ。この考え方を見ると、ここで読者と言われているのは、一見、具体的に実在する一般の読者であるような印象を受ける。それにしても「コード」とは何だろうか。それは、言語一般のことなのか、それとも文学特有言語のことなのか。前者だとしたら、「文学特有言語のコード」という言い方はできなくなるので、どうも後者らしい。しかし、もしそうなら、ここで言われている読者とは、文学の特有言語というコードを作者と共有している読者、つまり特定の読者ということになる。それにしても、文学の特有言語とはどんなものなのだろうか。ところで、この 20 のテーゼの第一のテーゼの第一文はこうだった。「文学というものがある(S.7 These I)」。

文学史に読者の視点を持ち込んだ草分けとして評価の高いヴァインリヒの論文に「読者の文学史のために」¹³⁾ というのがる。ここに描き出されている読者像は次のようなものだ。

「文学作品そのものは、・・・読まれない限りは、潜勢力として在るにすぎない。読まれて初めて、この潜勢力は実現される。つまり作品は・・・読者の内部に＜生起する＞(S.27)」のではあるが、個人としての生身の「＜読者それ自体＞は問題にはならない(S.28)」。さらに「文学コミュニケーションとは、割り当てられた役割による相互作用で(S.24)」、それが成立するのは「コード化のみならずコード解読にも成功する時だけである(S.23)」。言ってみれば、現実の読者は、文学コミュニケーションに参加したければ、「作品自身の中に含まれている読者の役割(S.28)」に従わなくてはならないのである。しかし「文学作品というものは任意の読者を前提にしているのではない(S.24)」ので、誰もがこれに参加できるわけではない。作品の中には読者の役割を指示する「シグナル(S.30)」があり、読者はこれに適切に応えなくてはならない。例えばトーマス・マンの『悩みのひととき *Schwere Stunde*』の作中の地名や人名、特定の時代を思わせる道具立て、人物の容貌や性格などの描写がすべて、この登場人物は「シラー」で、言われている作品は「ヴァレンシュタイン」であると、読む者に推測させるのであり、「こういう推測をしない者のためにこの物語は書かれているのではないのだ(S.31)」。「彼が正当な読者になるのは、彼がシラーの読者であるばかりか、シラーという作家に関してもできるだけ多くのことを知っているという場合だけである(S.32)」。もうひとつの例として、ヴァインリヒは、小説ジャンルに対して読者が抱く期待を裏切って（ほとんど）代名詞だけを使って話が進められるという形のシグナルを持った、ナタリー・サロートの『見知らぬ男の肖像 *Portrait d'un Inconnu*』を挙げている。マンの例では「博識(S.33)」ということであったが、この場合の読者の役割とは、読者の能動的な参加ということになる。「それ故この小説の文章は、・・・読者への呼びかけなのであり、彼の応答がなければ、それは未完成なままである。このことが読者を参加させるのであり、彼に作り手として共同作業すること、つまり共同創作を課するのである(S.34)」。マンの例では、博識によって特定の人物と作品に行き着くことが、そしてサロートの例では、想像力によって作品を（作者とともに）作り出すことが、読者の役割というわけだ。

それにしても、こうした考え方に、果して読者という概念は必要だったのだろうか。これは文学コミュニケーションにおけるコード解読の成功例だ。何がコード化されているのかを、すなわち、当該作品の意図は何かということを適切に理解できたときに初めて文学コミュニケーションが成立するのであり、また、そもそもコード解読に成功しなければ読者の資格はないというのであれば、この条件の下では、作品はその都度「消費」される対象でしかないことになるだろう。ここで「文学コミュニケーション」と呼ばれている事態は、「おい、お茶」と言う亭主と、彼の求めている湯呑み茶碗、熱さ、量、茶の種類などを適切に理解して、彼の好みのお茶の「実現」に成功する妻とのやりとりと同じではないのか。彼の好みが分からないようなら、妻として失格だということになる。しかし、これは、先のテーゼの「様々な読みの予期を持った様々な読者に対して、様々な意味を引き受けることになる」作品という考え方とは相容れない。ここに述べられているのは結局のところ、作品が読者に要求している（とヴァインリヒが仮定している）条件、つまり「作品の意図」だけなのだ。読者という概念もコミュニケーション・モデルも、作品の意図を記述するために必要な名目上のファクターにすぎない。そして、ここでは作品の意図が物のように取り出されてきている。取り出せるのであれば、

作品の意図は、「読者の内部に＜生起する＞」ものというよりは、読者に読まれる以前からあたかもそれ自体として存在しているもののようだ。しかし、もしそうではないとすれば、ここで挙げられていた事例に見られる作品の意図とは、結局ヴァインリヒその人自身の「内部に＜生起＞」したものでしかないということになるだろう。

4. 読者論②

ヴァインリヒの論考に比べると、イーザーの描きだす作品と読者の間の相互作用の記述は、はるかに具体的であるような印象を与える。ここで扱うのは「彼の初期の論攷のなかでももっとも高い成果を収めた¹⁴⁾」と言われる「テキストの呼びかけ構造」¹⁵⁾である。これは1969年に行われたコンスタンツ大学での教授就任講義で、これをより精密なものに発展させたのが、その七年後に発表された主著『行為としての読書』だ。この本の中で彼は、道具立ての変更と精密化を経て、ずいぶん複雑でこみいった話をしているのだが、その主張の原型は「テキストの呼びかけ構造」とほとんど変わるところはないように見える。

「特定の現実の対象を説明したり、生み出したりすることはないという点で他の種類のテキストと区別され、また、種々の考え方を提案し、経験的に知っている世界をちがう形で見せてくれる視点を開くという点で読者の現実の経験とも区別される(S.233)」ものであり、「通常はその意図をはっきりとは描き出さないという点で(S.248)」特徴づけられる、というのが文学テキストに対するイーザーの規定だ。そういうつかみどころのない文学テキストから隠れた意味を取り出してくる解釈行為に対して彼は批判的で、彼に言わせると、そうした確定的な意味を受け入れるかどうかという「単なるイエス／ノーの決定の要求とは比べものにならないぐらい多くのことが、テキストと読者の間では行われているのである(S.228)」すなわち「文学テキストの意味はそもそも読書過程において初めて生み出される。それは、テキストと読者の相互作用の産物だ(S.229)」というわけだ。彼によると、文学テキストは対象に対する反応であり、自ら作り出す世界に対する諸々の態度を提供するもので、読書を通じて読者がそういう反応や態度を自分のものにして初めて、文学テキストは現実性を持つことになる。

同一不変のテキストから、読者が個々別々の意味を作り出すこの相互作用の過程を記述するために持ち出されるのが「不確定性」という概念である。これには外的なものと内的なものの二種類があるという。まず「文学テキストは、『生活世界』の現実の対象とも、読者の経験とも完全には置きかえられない(S.233)」ので、その不一致が不確定性をもたらすとされている。文学テキストとは「現実対象の世界と読者の経験世界の間をいわば揺れ動いている独特の浮遊状態(S.234)」にあるというのだ。次に、テキスト内部に不確定性を生み出す「形式上の諸条件(S.234)」として、(インガルデンの「図式化された見解 schematisierte Ansichten」を援用して)「空所」の概念が持ち込まれる。

「互いに重なり合っている諸見解の間の関連は、それらが互いにどういう関係にあるかということがテキストの意図にとって重要なのに、通常はテキストには描きだされていない。換言すると、『図式化された諸見解』の間には、隣りあう見解の確定性によって生じる空所が発生するのだ(S.235)」。

読者がこうした空所を取り除くこと、つまり見解と見解の間を読者自ら関係づけることが、生産的な読書行為なのであって、空所こそが文学テキストの読者に対する呼びかけなのである。見解のひとつひとつは当該テキストの（それが描きだしている世界に対する様々な）「反応」や「態度」を表しているが、テキスト全体をまとめる「テキストの意図」は述べられていないので、読者は自分で一貫性のあるように見解と見解を（選び出して）結びつけていく。これが読者によるテキストの「実現」ということだ。

「現実対象の世界と読者の経験世界の間を」揺れ動く文学テキストを、不確定性は「読者自身の経験ないしは彼自身の世界表象に接続する可能性を形成する。この接続が行われれば、不確定性は消滅する(S.233)」。

この時、読者は「読むことでテキストの他者経験を私的な経験に変える(S.249)」のであり、そもそも明示されていなかった「テキストの意図」は「読者の想像力の中に(S.248)」あるのだという。したがって、この論考でイーザーは明らかに現実の読者を念頭に置いているはずだし、そうでなければ彼の考え方はそもそも成り立たない¹⁶⁾。

読者が想像力を働かせて「テキストの意図」を生み出すのであって、テキスト自体には存在しない、という主張は魅力的だ。しかし、こうした「読書行為における意味の産出(S.249)」について、イーザーは読者の完全に恣意的な解釈を認めているのだろうか。これに関する彼の考え方は、例えば次のような（作中に介入してくる作者の「注釈」に言及している）一節に間接的に窺える。「このように注釈は、新たな空所をテキスト内に発生させる評価の余地を切り開く。・・・しかし、注釈は評価のいくつかの可能性を同時に供しているので、これらの空所が任意に埋められるということにはならないのだ。こうして、この構造は、読者を評価に参加させながらも、評価のもとになる諸反応を制御しているのだ(S.240)」。

どうやら、読者には完全な自由はないようだ。作者の「注釈」に限らず、そもそもそれぞれの見解が確定性を持っているからこそ、その隙間としての空所があるわけだ。確定性を持つということは、イーザーの論旨だと、解釈の対象とはならないということなので、結局、読者のしていることは、プラモデル作りと同じだ。イーザーの言う「テキストの意図」とは、この例えでは設計図にあたるだろう。設計図がないので、プラモデル製作者は自分で部品と部品の接続を考えなくてはならない。イーザーはこれを読者に与えられている自由と呼ぶ(S.249)。だが読者の側から加工のできない見解は、形が変わらない部品であって、部品はその形から他の部品との接続を呼ぶだろう。ジグソーパズルですら完成できるのだ。諸々の見解が確定的なものであるなら、そのことだけでも、読者の接続の仕方は大幅に制限されていることになる。若干のちがいはあるにせよ、ある読者の作り出す解釈の産物は、同じ見解から組み立てられるのである限り、同一の作品に対する他の読者のそれと共通性を持たないはずがない。確定性を備えた見解というものが本当にあるのならば、それは、すでに中立的ではないのだ。それは、暗黙のうちに「テキストの意図」の方を向いているはずだ。イーザーの考えに従うなら、文学テキストはそれ自体としては、テキスト外の世界にも読者の経験世界にも属していないのだから、テキスト内の見解に確定性を付与できるのは（読者に読まれる以前にある）「テキストの意図」の他にはありえない。とすると、読後の「読者の想像力の中に」獲得される「テキストの意図」とは、そもそもテキスト自身が持っていた「テキストの意図」のコピーだとい

うことになる。結局のところ、読者は、イーザーの主張に反して、テキストの背後にある意味（＝テキストの意図）を取り出すことになるのである。つまり、イーザーの構想している読者も、彼がこの論考の冒頭で批判している解釈行為を行なっているのであって、ここで述べられているのは、従来の解釈のプロセスの記述にすぎないということになる。ヴァインリヒの言葉を借りるなら、ここでも読者は、確定的な見解を連結してテキストの意図を完成するという役割を担わされているのだ。だとすれば、読者の解釈には、イーザーが印象づけようとしているほどの多様性は望めないだろう。さらに、このテキストの意図という言い方にしても、こういうふうを考えてくれば、それが「作者の意図」と変わらないものだということがつく。この言い換えが不当なことでないとしたら、イーザーの文学テキストに対する規定も怪しくなってくるだろう。なぜなら、文学テキストはもはや「現実対象の世界と読者の経験世界の間をいわば揺れ動いている独特の浮遊状態」にあるものではなく、作者という現実に存在する者（の意図）を前提とすることになるからだ。どこに到達するかは読者が自分で決める（つまりテキストの意図は読者の想像力の中にある）のではないのであれば、イーザーが描き出した読書過程は、新聞記事や電気製品の使用説明書を読む時にも、そのまま当てはまるだろう。

5. 「文学とは何か」とは何か

読者に関する話はどうしても読者の主観性ということと無縁ではいられない。しかし、普遍的とは言わないまでも、一定程度の間主観的な地点に立たなくてはならないのであれば何らかの足場が必要になるだろう。それが、ヴァインリヒの場合は読者の「役割」で、イーザーの場合は「テキストの呼びかけ構造」という制御装置なのだと言える。さらに、考察の一般性は、前提としての文学の存在および定義、そして読者概念の設定の仕方にかかっている。彼らは「文学」、「読者」という言い方をする。「文学」という表現は、それ自体に「非文学」との対立が含意されており、また、その中には様々な種類やジャンルのものがすべて含まれているはずなのに、それ以上に「文学一般」を思わせる。同様に、読者という表現も、それが抽象的な構成概念でないかぎり、説明の修飾語はつけないで単に「読者」なのであり、それはいつも「文学の読者一般」を思わせる。彼らは、制御装置や「文学」「読者」という表現を使って、読書行為を一般的な体裁で論じて、客観的なモデルを構築しようとする。彼らが文学と呼んでいるものは新聞記事とははっきり異なるもので、文学を読む行為と新聞を読む行為は同じことではないのだ。彼らが読者と呼ぶのは、文学作品を読む読者、それも誠実に最後まで読み通す、場合によっては再読も辞さない読者のこと、つまりは作品に設定された「役割」を引き受ける読者のことだ¹⁷⁾。しかし、こういうふうに、読書行為に関する「客観的な」モデルを構築するというのは学問的な要請なのであって、そのモデルから現実の読書行為へ戻ってくることができるのであれば問題はないが、実際にはその客観性が増せば増すほど、そのモデルは読書行為の実態から遠のいてしまうだろう。文学研究において、一般性、客観性を目指すあまりに、文学作品や読者の個別性を捨象してしまうことにどれほどの価値があるのかは疑問だ。それに、そもそも読書過程という営みを一般的にモデル化することが可能なのかという疑問も湧いてくる。そのことに関連して、また、そのこと以上に問題なのは、ヴァインリヒやイーザーが「文学」と言う時、それは彼らが文学と読ん

でいる作品のことなのであり、彼らの「読者」という表現が指しているのは、彼ら自身のことではないのかという点だ。なぜなら、文学観というものは他者とは共有できないからだ。つまり、特定の言語表現を他の言語表現から隔てて文学としてとらえ、それに何らかの特別な地位を与えること、あるいは、当該作品を評価すること、そういう行為を保証しているのは、（文学そのものとか文学史や文学研究なのではなくて）当人の（文学に関するものもそうでないものも含めた）経験に他ならない。例えば、イーザーの「リチャードソンは現代の我々にとってはほとんど死せるテキストだが、フィールディングは我々にもまだ面白く読める(S.242)」というコメントの根拠は、彼の主張する「テキストの呼びかけ構造」とは何の関係もない、両者の作品の内容に下すイーザーの評価のちがいにすぎない。このコメントの直後に彼はフィールディングの作品分析を始める。前後の脈絡とはあまり関連性を持たないこのコメントに、イーザーの文学観が少し垣間見えるようだ。「文学について話したり書いたりする人は、・・・つまり、『作者』あるいは『テキスト』に『関して』は原理的に何ひとつ言うことはできない。彼にできるのは、『作者が意図していたこと』あるいは『テキストそれ自身の中にあるもの』を（取り出してきて）説明することではない。彼にできるのは、ただ、いわば自分自身を記述しながら、テキストや作者という現象を生み出すからくり（一種の『受容』）を述べることだけだ¹⁸⁾」。もちろんイーザーやヴァインリヒの文学観そのものを批判したいのではなく、彼らがそれに一般性という衣を着せてしまうことに疑問を感じるのだ。彼らの書き方は、いわば、「文学とは何か」という一般的な問いに対して、自らの文学観で答えていることになるのだ。しかし、その答え方にふさわしいのは、むしろ、「あなたにとっては何が文学か」という問いかけのはずだ。

ヴァインリヒにせよイーザーにせよ、彼らの発想の根底にあるのは、文学コミュニケーションというものだ。しかし読書行為とは、ほんとうにいわゆるコミュニケーションだろうか、（ヴァインリヒ、イーザー言うところの）「相互作用」だろうか。文学テキストは「シグナル」や「空所」で読者に参加を呼びかけて、読者はそれに応えて文学的世界を想像＝創造することができる、簡単に言うと彼らの相互作用とはこういうものだろう。だが、「テキストが我々とは無関係に存在する『対象物』として現れるとか、『作者』あるいは『テキスト』自身が我々に話しかけてくるという疑似的な事態を作りだせるといった考え方は、確かにふだんの読書にはずいぶんと刺激を与えてくれるけれど、しかし、受容という現象の十分な説明としてはもはや受け入れがたいものだ¹⁹⁾」。

読書において読者の手元にあるのは、表現の連鎖と自分の経験だけだ。日常的な会話での言葉の理解と読書過程で起こっていることは原理的には同じなのだ。表現があって、それを自分の表象へと転換する。ただ、前述のように「あらゆる言語コミュニケーションには、本来備わっている避けがたい不確実性がある」ので、対人的なコミュニケーションの場面では、コミュニケーションの（不）成立を「確信」するために、話し手も聞き手も言語外的な事柄や話の脈絡から、自分と相手の表現において実現されている表象の連結パターン（＝その時々「意味」）が両者の間で「両立可能」であるかどうかを絶えず推測しなくてはならない。しかし、読書過程の場合には、発信者は目の前にはいない（のが通例だ）。対人的な場面では聞き手の目の前で表現の連鎖が作られていくのに対して、読書の場合は語や文がすでに特定の連鎖に組み合わされてしまった形で読者の前に用意されている。いわば、

それはかつてどこかで誰かが表象を連鎖させることで何らかの「意味」の発生を託した表現である。つまり表象の連結可能性を特定の「意味」へと実現しようとした試みである。これを読者は自らの経験に基づいて表象へと転換する。この時、表現として実現されている語と語の連結、文と文の連結が、読者にいわば自動的に表象の連鎖をもたらすこともあれば、読者の経験が許す表象連鎖のパターンと抵触することもある。「両立可能」でなくなる、まさにこの時、読者は当該の語や文が持ちうる他の連結可能性を、つまり表現として実現されていない表象の連結可能性を意識にのぼらせることになる。読書行為において「空所」と呼べるものがあるとしたら、表現が実現している連鎖と読者の表象連鎖の許容範囲とのズレが意識させる「それ以外の表象連結の可能性」だろう。その表現の連鎖は「誤用」かもしれないし、「修辭的な文彩」かもしれないし、全くの「独創」かもしれない。いずれにしても読者はその「空所」という異和感を、対人的な場面でのように発信者に尋ねたり共有する状況を手がかりにして、解消することはできない。これはイーザーの想定していた、テキスト内部にあってテキストと読者の相互作用を生み出すものではなく、読中、読後に読者の内部に残ってゆく、彼の経験が消化しきれない異物としての「空所」であり、それは文学作品に固有の特性ではなく、言語という道具が一般的に持っている性質である。読書とはいわば、他者の表象が生み出した表現の連鎖と、読者の経験とがせめぎあう場である。読者は、テキストと共に「共同創作(ヴァイクリヒ)」する「共同作者(イーザー, S.237)」ではなくて、「『自伝作者』としてふるまうのである²⁰⁾」。こうした読者のとらえ方をすれば、読書過程はもはや相互作用ともコミュニケーションとも呼ばなくなる。イーザーの主張する「見解の確定性」が読みの制御装置として常に効力を持つとは期待できない。「見解」自体が(確定的どころか)読者の解釈の産物でしかないからだ。テキストの意図というのは、イーザーが考えていた以上に、読者の産物にちがいない。ここで言われている読書とは、読書一般のことである。対象は新聞記事でも使用説明書でも小説でも詩歌でもかまわない。理解の過程で起こっていることは同じだ。最初に文学があって、それにふさわしい読みがあるとはもはや考えられない。まず読書一般に共通の理解の過程があって、その読みの経験の中に、いわゆる「文学」を作り出す読み方があるのだ。表現それ自体の属性としての文学性ではなく、読者の経験に刷り込まれている文学性についても一考の価値はあるように思う。(これは今後の課題だが)その読者にとっては何が文学(的なもの)なのかを考える場合に、上述の「空所」という考え方はさらに重要性を増してくるだろう。

もっとも、文学研究者や評論家とちがって、一般の読者個人には、自分の中の「文学」を言葉で表現する義務はない。仮にそれを表現しようとしても、自分の表象に追いつかない「言葉」に失望するだろう。あるいは、だからこそ読者は、文学作品という「表現」に価値を置くのかもしれない。

注

1) 正高 信男 『0歳児がことばを獲得するとき 行動学からのアプローチ』(中公新書1136), 中央公論社, 1996(1993)。

2) 上掲書 101-102 頁。「(1)ことさら声の調子(高さ)を高くするか、(2)またそれと同時に声の抑

揚を誇張する」という、文化圏を越えて共通の特質をもった母親の赤ん坊に対する話し方。いわゆる「赤ちゃんことば」（食べ物を<マンマ>、車を<ブーブー>と言う類）とは別物。

3)上掲書 128 頁及び 136-137頁。喃語に使われる音のレパートリーは非常に限られたもので、音の種類も指示対象との対応も乳児の一人一人で異なっているのだが、乳児の行動パターンと喃語のメロディタイプとの間には個体を越えて共通性が観察できるとされている。例えば、おもちゃに関心が向かっている時には、発声音の語尾は上昇も下降もしないが、母親の注意を引こうとするときには発声音の語尾は上昇し、おもちゃを人に渡そうとするときには下降する、というように。

4)上掲書 116 頁。初語発現以前の現象に関する研究が不十分であったことは、例えば次のような解説の仕方にもよく表れている。「ことばの活動の発達については二つの時期を区別するのがならわしになっている。言語以前の段階である第一の時期は、生後十カ月間にはほぼ該当する。．．．第二の言語期は一年目の終わり頃から始まる。．．．この第二年目を通じて、明らかにことばに関係する活動が構成されていく。．．．」 O.デュクロ/T.ドロー 『言語理論小事典』（滝田文彦他訳）、朝日出版社、1982(1975)、251 頁。（下線は引用者による）

5)例えば、次のような考え方だ。「つまり、カテゴリー属性のすべてを備えた理想的な成員についての心的表象をわれわれは作りあげていると考えることはそれほど不自然なことではない。あるカテゴリーのこのような理想的成員は原型(prototype)とよばれている。「家具」, 「いす」, 「ソファ」等どのレベルにおいてもそれぞれのカテゴリーの原型が表象として存在しうるであろう。これはあるカテゴリーをさす語の理想的な意味と言ってもよいのではないだろうか。具体例の意味はこの原型に照して理解されると考えることもできる。」 御領 謙 『読むということ』 東京大学出版会、1994(1987)、24-25 頁。（下線部は原典では圏点強調）

6)同様の見解としては、例えば：„Obwohl Wörterbücher eine mehr oder minder vollständige Liste der in einer Sprache gebräuchlichen Wörter enthalten, geben sie die Bedeutungen der Wörter mit Hilfe anderer Wörter an. Ein solches Wörterbuch kann den Umfang des eigenen sprachlichen Codes erweitern helfen, aber man kann daraus nicht lernen, was die Wörter verschlüsseln.“ Glasersfeld, E. von : Radikaler Konstruktivismus. Ideen, Ergebnisse, Probleme. Frankfurt a.M. / Suhrkamp, 1997. S.226.

7)この着想に間接的にヒントを与えてくれたのは、W.R.ブレイン『経験の本性』（山鳥 重訳）、みすず書房、1979。例えば、「すべて知識というものは主観的でありかつ客観的であります。そうでなければ知識ではありません。客観的側面は知識が外部対象について与える情報であります。主観的側面は知識を私の知識とする事柄、すなわち私の過去や現在の経験と、その知識との関係、およびその対象表象に私の脳が与えることのできるもののすべて、であります。」 55 頁。

「すなわち、われわれはめいめい自分の脳が作り出す自己固有の私の知覚空間を持っているのです。そこには自己固有のすべての知覚対象が存在しますが、それに対応する物理対象は

存在しません。」 58 頁。

- 8)Vogt, Jochen : „Grundlagen des Textverstehens und der Interpretation“.
In: Bauer, Karl W.(Hrsg.) : Grundkurs Literatur- und Medienwissenschaft Primarstufe.
München / W.Fink, 1992. S.23-39, hier S.27.
- 9)Glaserfeld, S.161
- 10)ebd. S.232-233.
- 11)Weinrich, Harald : „Kommunikative Literaturwissenschaft“.
In: ders. : Literatur für Leser. Stuttgart / Kohlhammer, 1971. S.7-11, hier S.9.
- 12)いわゆる Höhenkammliteratur とコミュニケーション概念との関連を、ルーマンを援用して考察している論考がある。Stanitzek, Georg : „Kommunikation(Communicatio & Apostrophe einbegriffen)“. In: Fohrmann, J. u. Müller, H.(Hrsg.): Literaturwissenschaft. München / W.Fink, 1995. S.13-30. この論考では、ヴァインリヒやイザーが避けている(様に見える)叙情詩とコミュニケーションの問題が扱われている。
- 13)Weinrich, Harald : „Für eine Literaturgeschichte des Lesers“.
In: ders. : Literatur für Leser. Stuttgart / Kohlhammer, 1971. S.23-34.
(ただし初出は In: *Merkur* 21 (1967), S.1026-1038.)
- 14)R.C.ホルブ 『[空白]を読む 受容理論の現在』(鈴木 聡訳), 勁草書房, 1986.
- 15)Iser, Wolfgang : „Die Appellstruktur der Texte. Unbestimmtheit als Wirkungsbedingung literarischer Prosa“. In: Warning, Rainer(Hrsg.) : Rezeptionsästhetik. München / W.Fink, 1975. S.228-252.
- 16)『行為としての読書』でイザーは「内包された読者」という概念を導入しているが(Iser : *Der Akt des Lesens*. München / W.Fink, 1976. S.60-67),これに関するもっともな批判が、ホルブの 132-133頁に見られる。
- 17)例えば Vorderer は、これまで暗黙の前提とされてきた読者像を克服すべく、心理学的な方法で、
1)「文学的に」読む理由、2)テキスト選択の理由、3)テキスト受容の中断、4)テキストに対応する読み方、といった現実の読書行為に則した読者研究に取り組んでいて興味深い。
Vorderer, Peter : „Lesen als Handlung“. In : Barsch, Achim, et al. (Hrsg.) : *Empirische Literaturwissenschaft in der Diskussion*. Frankfurt a.M./ Suhrkamp, 1994, S.206-222.
- 18)Scheffer, Bernd : „Interpretation und Blamage. 'Vor dem Gesetz' - Präambeln aus konstruktivistischer Sicht“. In: Bogdal, K.-M. (Hrsg.) : *Neue Literaturtheorien in der Praxis*. Opladen/ Westdeutscher Verlag, 1993, S.140-158, hier S.157.
- 19)ebd. S.149
- 20)ebd. S.154

(ドイツ語非常勤講師)